選択的堕胎と日本での放射能汚染について

Toru Furui, PhD, PT.[1)] , Masayo Furui,[2)] Setsuko Kida.[3)]

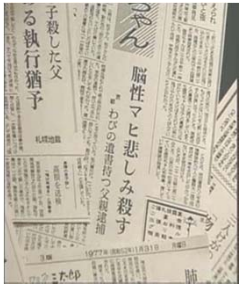
1)Department of physical therapy, Osaka Kawasaki Rehabilitation University, Kaizuka, Japan.
2)Society for Health and Life of people with Cerebral Palsy, Osaka, Japan. 3) Refugee from Fukushima nuclear disaster, Japan.

Health in All Policies
APHA 143rd ANNUAL MEETING & EXPO
OCTOBER 31–NOVEMBER 4, 2015 | CHICAGO, IL

優生保護法の「優生手術」による断種

1940年,大日本帝国の近衛首相は国民優生法(NEA)を成立させた。遺伝性の身体・精神障害や知的障害のある人が断種の対象とされた。戦後の1948年に,新政府は優生保護法 (EPA)を成立させた。しかしこの法律は単なるNEAの置き換えではなく、全ての面でより凶悪だった。第1条では「この法律の目的は不良な子孫の出生を予防することにある」と明記した。そしてNEAに比べ、はるかに多様な人々を対象に、本人の同意に基づかないで、あるいは同意せざるを得ない状況下で、障害を理由とする断種や堕胎が実施された。「優生手術を行うことが公益上必要である」とされ、国家によって強制的に断種された障害者は、統計上に示されただけでも約16,500人にのぼる。これが48年間綿々と続き1996年になるまで止められず、優生思想は人々の心深くに浸透していった。

障害児を殺しても罪にならないのはなぜか ？

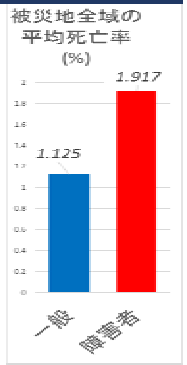


しかしここで特筆すべきなのは、1970年代の日本の障害者運動が「内なる優生思想」について重要な疑問が投げかけたことだ。1970年、ある母親が脳性麻痺(CP)のわが子を殺す事件があった。世間は子供の命ではなく母親に同情し減刑嘆願運動が起こった。CP者の団体青い芝の会がこれに抗議して当時の障害者運動を人権と生命倫理を問う運動に高めてリードした。青い芝の会は障害者差別の原因は、健全者のエゴイズムにもとずく内なる優生思想にあるとして鋭く糾弾した。

青い芝の障害者たちは、当時の日本社会に広く浸透していた優生思想にもとづく、障害者を劣った「あってはならない存在」と見下す基本的認識に対して果敢に挑戦していった。たとえば1968年兵庫県は「不幸な子供の生まれない対策室」を設置し、優生思想にもとづき障害者を不幸な子供と決めつけて、生まれる前に抹殺しようとした。世間に広く浸透し加速する内なる優生思想に必死に抵抗した障害者運動の粘り強い反対にあい、対策室は1974年に閉鎖された。並行するように、政府の優生思想にもとづく政策も進化・継続していった。1972年，優生保護法の改正案では「胎児条項」が加えられようとしていた。これは「医学的に治療困難な疾患」が胎児に見つかった場合に、堕胎を合法化しようとするものだった。この案は、今に続く選択的堕胎への道を開くだけでなく、それまで女性自身の意志を反映する堕胎に適用されてきた「経済的理由」も無くす案だったので、女性権利運動と障害者運動が歴史上初めて共同で反対し廃案となった。にもかかわらず、それから時を経て、優生保護法が母体保護法と改名された後は、問題がかえって不可視化していった。遺伝子医療や胎児診断の技術的進歩が静かに確実に進んで、世間では「内なる優生思想」の議論など無かったかのように無視する風潮が支配的になってきてしまっている。

被災地障害者支援センター福島での経験

2011年3月11日,東日本大震災が起こり、49分後津波が海岸線を襲った。 NHK の調べでは、健全者に比べ約二倍(左図)の障害者が犠牲になったという。原因は移動困難がもっとも多く、つぎがコミュニケーションの欠如とされたが、日本社会のアクセスの悪さと日本の放射線防護・災害準備・リスクコミュニケーションの欠如の結果であると総括されている。津波被害は豪邸も貧民街も平等に被災した阪神大震災とは大きな違いがある。我々が、南相馬を訪れたとき衝撃的な話と光景に直面した。海岸線から10km以上はなれた場所の、まだ平屋建築の外観が残る老人ホームの被災した痕地を訪ねた。被災者の証言によると、自分で動ける老人たちは命からがら屋根の上に上がって難を逃れたが、ベッドから自力で出れない人たちは、生きたまま波がひくとともにマットレスごとプカプカ浮いて、ゆっくりと沖合いに連れ去られていったという。目の前で、仲間がさらわれていくのを見守るしかなかった。「見殺し」にしたという倫理的な自責の念から「人間動けなくなったおしまいだ」という優生的発想をかえって強め都合の悪い事実を合理化することもあっただろう。原発事故後の放射能汚染からの避難の際中に多くの「見殺し」があったことは、あちこちで異口同音に報告されている。不都合な現実から目をそらさないなら、被災時の「まず自分の安全確保が最優先」という原則や、救うべき命を選別する「トリアージ」などに「適者生存」を旨とする優生思想の残照が見え隠れする。放射能汚染の不安がひろがるもっと以前に、すでに優生思想は我々を飲み込んでいたのかもしれない。

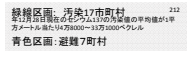


不安にならないで、どんな命も大切に！

原発事故後、徐々に人々は内部被曝の影響を深刻に心配するようになり、「福島では堕胎が水面下で増えている」とも言われた。福島の若い女性たちが、結婚できないと言っているのも実際に耳にした。ここでも再び、原発事故でかけがえのない命が奪われることになる。日本は障害者の人権を保証しない「見殺し」社会だと常日頃から身にしみている。だから、障害を持った子供を育てる不安はすぐに恐怖にまで高まる。そのあと何が起こるのか？優生思想は特定の人々を劣性とみなし社会から抹殺する。今日では、以前のように政府や医療者による露骨な優生手術こそなくなってはいるが、広く浸透した優生的価値観の判断基準に従う個人の選択によって「劣ったもの」をなき者にする「自由主義優生思想」の仕組みに置き換わっている。

今は福島のこと、いつかはあなたのまちのことに　木田節子

	自然流産率	出生数	自然流産数
2011年	12.3/1000	15072	186
2012年	15.4/1000	13770	212



2013年の９月、娘から「来年の春には、おかあさんはおばあちゃんになるよ！」と聞かされてたった３週間後、超音波診断によって、胎児の生育が確認できないと言われた。私は、妊娠初期でもあり、まだまだ育つ可能性があるのでは…と思ったが、医師によって、胎児が既に死んでいるのが確実であるかのような「稽留流産」という診断名を告げられ、娘は中絶することになった。その後に娘の友だち二人が同じ理由で中絶していたこと、またもう一人は心音が弱いという理由で出産は諦めたほうが良いと言われたと知り、同級生でわりと仲良しだった4人が4人とも妊娠異常を経験するものだろうかと考えるようになった。後に娘は職場の同僚の２人にも「実は私も中絶したのよ」と打ち明けられ、中には6ヶ月まで育っていたのに急に中絶した人もいたという。

私は、その年の8月に広島の方から聞いた「原爆投下後の広島では奇形の子どもがたくさん生まれ、その胎児は標本にされアメリカのABCCの手に渡った。やがてその話を聞かなくなったが、それはそのような事態が増えることを防ぐために中絶させられたからではないか」という話を思い出し、何か共通性があるような気がして、ある集会でこの話をしたところ「私は医者ですが、広島で行われたことは聞いています。国は広島でしたことを福島でもやるのではないかと心配していたが、もうすでに始まっているかもしれない」と言われた。「ヒロシマとフクシマ」「妊娠異常」の２つの言葉がキーワードになってよくないことばかり連想させられる。福島では出産異常が起きている。震災後の死産率が震災前に比べて上がっている。今年になって、娘は以前の同僚から「妊娠6ヶ月で中絶した胎児は体の一部が欠損していた」と聞かされたが、もちろん報道なんかされない。そうやって原発事故による都合の悪いことは隠されていくのだという疑惑が膨らんでいく。

しかしながら、娘はおなかのあかちゃんが生育不良と言われた時、電話で私に「おかあさん、もしかしたらこの子は障害を持って産まれてくるかもしれないけど、私頑張って育てる。やりたいことは何でもさせてあげたい。おかあさん手伝ってくれる？」と言っていたことも明記しておきたい。私は「娘は覚悟したのだ。仕方がないと簡単に諦めるような人間じゃなくて良かった」という感動で「分かったよ。しっかり育てようね」と言うのがやっとだった。　原発は必要という人たちには「誰かの犠牲は仕方ないと言うとき、あなた自身の命を犠牲にする覚悟はありますか」と聞きたい。人の命は同じはずだ。「今は福島のこと、でも、いつかはあなたの町のことに。そして自分のことに。」の言葉の意味を考えていただきたい。

今は障害者のこと、明日はあなたのことに

日本は急激な高齢化社会をむかえ、ほとんどの人が健全者のままでは死ねない。言いかえれば人生の後半いつか、何らかの障害と共に生きることになる。にもかかわらず、誰一人として自分がその事態に陥るまで想像もしなければ準備もしない。さらに国土は放射能で汚染され、だれもが放射能による「想定外」の影響を受ける可能性さえある。原発事故による放射能汚染の時代を生き抜くには、病気や障害や加齢や生命の予後に関わらず、だれもが、そのかけがえのない人生を満喫できることが重要になるはずだ。こういう時代では、生まれながらの障害者は障害と生き抜く術を広める教育的社会資源ではないのか。未来の社会の貴重な水先案内人の障害者を葬り去っていく社会の未来は、次々と人々を排除し続け最後には何が残るのだろうか？

放射能汚染と真に向き合う社会とは、今のように、人々を不安に落としいれて生命を絶つ選択を強いるのではなく、その家族もまるごと支えきるという姿勢とその覚悟(具体的取り組み)が求められている。これこそ、今まっさきに議論しなければならないことであり、原発事故からわれわれが得た貴重な教訓だったはずだ。無謀な原発の再稼動に時間を浪費している余裕など何処にも無い。一刻も早く、ひとりひとり誰もが潜在的に持つ、エゴイズムに満ちた「内なる優生思想」を克服する方法について一緒に考え始めなければ、このままでは自分で自分の首を絞めるような事態に陥って、誰もが生きづらい社会になるに違いない。

今は障害者のこと、明日はあなたのことに‥

CONTACT ： WWW.CP-RESEARCH.JP